

## 2 中高連携授業変革の歩み

### (1) 武芸川町立武芸川中学校における実践

#### < 授業実践 >

授業実践に向けての構え

昨年度の中高連携プロジェクトの成果と課題を「研究推進体制、教師の意識等について」と「生徒の実態等について」の観点から検討した。その中で、本年度において課題として残されたのは次の2点である。

)「聞く」「話す」活動中心の中学校において、語彙や文法などの力を付けるための指導の充実を図ること(生徒の実態)

)公開授業や研究会の中で、授業者が生徒の実態、ねらいや指導方法を明示するとともに、参加者はそれを理解した上で授業研究を進めること(生徒の実態)

そこで、これらの課題を解決するために、次の研究テーマを設定し、その具現に向けて授業研究会を行うことにした。

#### 研究テーマ

表現力の向上に向けての指導の在り方

1 回目の授業交流:「書くこと」を中心とした表現力の向上をめざして

2 回目の授業交流:「話すこと」を中心とした表現力の向上をめざして

上記の課題 については、第1回の授業交流会において「書くこと」を中心とした授業を行い研究を深めることとした。さらに、課題 について、第2回目の授業交流のねらいを指導方法改善に焦点化するために、生徒の実態を明示するとともに、中高それぞれがつながりのあるねらいの設定や共通した授業形態の「話すこと」を中心とした授業を実施し、研究を深めることとした。

また、以下の2点を本年度の具体的な取り組みの内容とし、研究テーマが具現できるように考えた。

- ・コミュニケーション能力の基礎を育てるために、ALTの効果的な活用や、学習形態の工夫を行うこと
- ・音声による表現能力を確かな力として定着させるために、「書く」指導を充実させるための学習形態を工夫すること

#### 第1回授業交流研究会

【日 時】 平成14年6月11日(火)

#### 【公開授業】

- ・単元名 「Unit 2 : Don't Throw It Away !」
- ・授業学校・学級 武芸川町立武芸川中学校 3年1組
- ・主な提案内容

本時の授業においては、「話すこと」と「書くこと」の関連を図り、授業で「話したこと」が「書くこと」により着実に定着することをねらいとした。

#### ア 現在完了形(継続)の意味や文の特徴の確認

文型の意味や特徴、用法などの文法事項の定着を図ることは、「聞く」「話す」ことによるコミュニケーション活動を活発に行うために、表現の基礎・基本を培うことにつながり、大変重要であると考えられる。本時においては、導入場面で現在完了形(継続)の意味、特徴、用法について理解させることにより、生徒がそれをを用いたコミュニケーション活動を活発にすることにつながった。

## イ 文法事項の定着を図るための問題への取組(ドリル学習)について

ここで、教科書の“ Listen ”や“ Speak ”を用いて、現在完了形の特徴を再確認するドリルを行った。継続用法のポイントとなる言葉として、期間を表す言葉が確認でき、文の特徴 have+過去分詞の定着を確認する上で非常に有効な手だてであった。



## ウ 現在完了形を用いて身近な話題に関するの表現活動について

本時の終末の活動として、現在完了形(継続)を用いて身近な話題を使って文を作成した。「武芸川町にどれくらい住んでいるか」とか、「何年間それぞれの部活動に取り組んでいるか」といった話題について「書くこと」で表現することにより、生徒たちに現在完了形(継続)の文の特徴と用法について定着を図ることができた。

### 【授業研究会】 ( 成果 課題 )

中高ともオーラルによるコミュニケーション活動と、「書くこと」による表現力の育成との関連を今後ともしっかりと図って授業をすすめていく必要がある。

個に応じた指導、学習意欲の向上につながる指導を、ALTの活用や学習形態の工夫を通して考える必要がある。

### 第2回授業交流研究会

【日 時】 平成14年11月13日(水)

### 【公開授業】

・単元名 Unit5 : A Park or a Parking Area?

Speaking Plus3 : Let's go to the Concert

・授業学校・学級 武芸川町立武芸川中学校 2年1組

・主な提案内容

本時の授業においては、ALTとのチーム・ティーチング等学習形態を工夫することにより、コミュニケーション活動を一層活発にし、「話すこと」による表現力の向上をねらいとした。

### ア 本時の活動への見通しや大切にすることを提示するALTとのモデル提示

導入の段階で、ALT(1名)とJTE(2名)で、2つモデル対話を提示した。本時の活動への見通しや意欲をもつこと、さらに、課題解決に向けて大切にしていこうことを確認するのに有効であった。

### イ 表現技能に関する個人目標の設定

本時で身に付けさせたい力を明確にするために、評価規準を「大切なことを伝えることができる」と設定し、「正確に( where, what, when )の内容を伝えることができる。」等、細分化し、具体的な個人目標をもたせてコミュニケーション活動に向かうことができるようにした。その結果、生徒一人一人が課題を意識し、その達成に向けて主体的に活動に取り組む姿が見られた。さらに達成できたかどうかを終末に自己評価と相互評価により確認することで、自己の変容を自覚したり、次時への課題を明確にしたりすることにつながった。

### ウ 学習形態の工夫〔ペア活動 対話活動 (スクランブル) 中間反省会 対話活動 (スクランブル)〕

・ペア活動 : お互いの表現を確認する。

・対話活動 : 相手の情報について理解できたことをメモすることで確認しながら、お互いの表現を交流する。

・中間反省会：本時のねらいに近付いている優れた生徒の表現を紹介し、さらに正確に内容を伝えることができるよう指導する。

・対話活動：中間反省会から課題を明確にして対話活動を行う。

こうした指導過程を踏んだ結果、「正確に内容を伝える」対話を行うことができた。

#### 【授業研究会】( 成果 課題 )

ノート指導、単語テストなどの継続した指導により、基礎・基本の定着を図ることができた。

高等学校の「オーラルコミュニケーション」の指導(授業過程)との関連を明確にすることができた。

授業中の教師による評価と生徒による自己評価・相互評価を次時につなげるように、単位時間の課題や課題達成のための視点を具体的に提示する必要がある。

#### <グローバル・スタンダードによる英語力診断>

ケンブリッジ英検では、特に「聞くこと」に弱さが見られた。この結果を参考にして授業の中でALTの協力を得ながら以下のような指導を行い、「聞くこと」の能力の向上を図っている。

- ・導入の場面において、ALTによるオーラルイントロダクションを位置付ける。
- ・聞き取る力をつけるため、TFテストやQAを位置付ける
- ・定期テストにおいてリスニングテストを実施し、その評価を指導に生かすようにする。

#### <イマージョン・プログラム>

外部講師の活用・「選択英語」で行ったスピーチコンテストの指導を通して、生徒たちは英語特有の自然な表現、発音そしてイントネーションを学び、地区大会で入賞を果たした生徒がいた。また、武芸川町常駐のアメリカ人のALTに加え、イギリス人、オーストラリア人のALTの生の英語に触れることができ、「英語にもいろいろな種類があるんだ。」とその特徴について興味をもつ生徒もみられた。

環境の充実と活用・英語の歌やゲームのビデオテープや英語に関する本を購入することにより、生徒たちはより一層英語に興味をもつことができるようになった。特に、「選択英語」では、「英語の歌」のビデオを参考にして歌ったり、英語で書かれた物語を読んだりするなど、多様な活動に取り組み、幅広い知識を身に付けることができた。

#### <成果と課題>

授業交流研究会では、「書くこと」「話すこと」について共通の課題のもとに活発な意見の交流がなされた。その結果、中学校としてノート指導や表現の正確さを定着させる指導を継続的に行うことが大切であることが分かってきた。

ペア、スクランブル活動等の授業形態について、中高とも授業交流の中で、ねらいを明確にすることが生徒に力をつけることにつながることが分かってきた。また、その中で生徒の変容を的確に捉える教師の評価や生徒の評価を充実させることの大切さが分かってきた。

ケンブリッジ英検を通して、生徒の英語力の診断が客観的にでき、授業改善の一助となった。特に、「聞く力」が弱いことが分かったので、授業の中でALT等によるオーラル・アプローチを意図的に重視し、成果をあげることができた。

イマージョン・プログラムの中で、外部講師や英語教材を積極的に活用することを通して、生徒たちはイギリスやアメリカの文化に興味をもつなど、英語学習への意欲の向上を図ることができた。定期テスト等の資料を交換するだけでなく、中高双方の定期テストの評価に関わった研究を進めることが必要である。特に、授業の改善に向けて、評価につながるテストの交流を通して、指導の重点についての交流を進めていく必要がある。

